



出張報告書

令和5年 8月 3日

尼崎市議会議長 様

会派名 公明党  
代表者氏名 前迫直美  
出張者氏名 開康生、蛭子秀一、  
東浦小夜子、中村敦子、田中俊幸

このたび、出張しましたので、次のとおり報告します。

1 出張期間 令和5年7月20日から令和5年7月21日まで

2 結果の概要

用務先  仙台市	報告事項 (この欄には要点を箇条書きにし詳細事項がある場合は別紙添付) 東日本大震災から学ぶ防災防災 【 仙台西口ビジネスセンター 】 ・災害時に人はこう考え動く ～災害時の心理と情報認知～  ・東日本大震災への宮城県警の対応  ・視察、震災遺構仙台市立荒浜小学校
添付書類 ■ 出張報告書	備考

3 届出事項の変更等  なし  あり (内容は裏面に記載)

旅費の精算

<input type="checkbox"/> 精算額は、令和 年 月 日届け出た額 ( 円) と同一額である。  <input checked="" type="checkbox"/> 届出事項の変更等により、別途精算する。(精算額は裏面に記載)
---

(裏面)

届出事項の変更等の内容

変更等の事項と理由

中尾議員公務のためキャンセル。  
航空券キャンセル料 31,588円は中尾議員が補填した。

支出額	528,192円
精算額	440,160円
支出 差引額 戻入	88,032円

変更前と後の日程

	月	日	日	日	日	日	日
前 発着地							
後							
前 経路							
後							
前 用務先							
後							
前 宿泊先							
後							

## 仙台研修、視察報告

報告者 開 康生

研修日時；令和5年7月20日(木)13:30～17:00

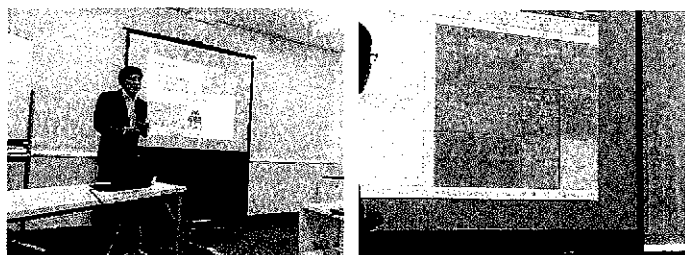
研修会場；宮城県仙台市青葉区本町 1-5-31 TKP 仙台西口ビジネスセンター

### 【研修テーマ】 13:30～

#### 1. 災害時に人はこう考え動く～災害時の心理と情報認知～

講師；東北大学（行動科学）認知心理学教授 邑本 俊亮（むらもと としあき）氏

災害時の人間の行動は、経験・知識（記憶・期待・思い込み）等含め行動を起こすが、必ずしも正しい判断、行動となっていないケースが散見される。



- 1.)パニック神話⇔災害や事故に巻き込まれると人々はパニックとなる。ギリシャ神話の神 PAN（パン）の大混乱を起こす神が語源とされ、災害情報を発信する側では、根拠を示して避難指示することが必要である。
- 2.)発災時、人は何を思う⇔災害研究のインタビューデータ「まさか本当に津波が来るとは思わなかった。」災害時の認知バイアス（かたより・歪み）をかけて人は判断する。情報が届いていないわけではないが、自分は大丈夫（楽観主義バイアス）、自分の気持ちを確認してくれる情報を探し求める（確認バイアス）他人と同調が、多数派の他人は逃げない（集団同調性バイアス）等人間の認知・判断にはバイアスが付きもの。いざという時には、バイアスを振り払う心構えが必要となる。
- 3.)危険スイッチが入るとき⇔何らかの切っ掛けがある。避難を促す声掛けは、環境の明らかな異変やあの人が強く言うことだから。声掛けなど切迫感、命令口調（みんな逃げろ！車は諦めろ！）が有効である。
- 4.)緊急時の心理と行動⇔非常ベルを聞いてすぐに動けるか。①情報処理範囲が狭くなる②注意集中による見落としが起こる③熟慮的思考が困難になる④（大災害時には）家族のことが気になるなど、すぐに避難しなかった上位三点の理由には、○自宅に戻ったから。○家族を探しに行ったり、迎えに行ったから。○家族の安否を確認していたから。であった。【津波てんでんこ】の由来を再認識した。

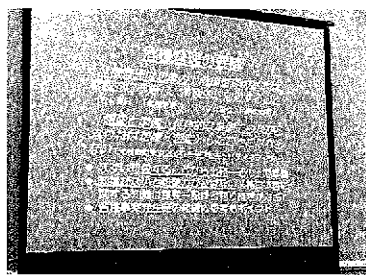
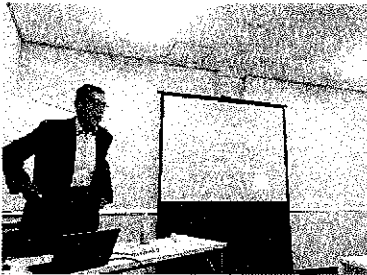
5.)今後のためにできること⇔【知ること】災害・人間の認知特性【育むこと】災害を生き抜く力、災害時に体が動くようにする（防災訓練）【忘れないこと】災害の経験・災害の教訓。情報を受け取る際の個人差では、事前の知識、経験により差が生じること。経験や確かな知識が必要であり、必要な時に、その知識を活性化できることが重要となる。

○震災被災者78名の聞き取り調査及び約1,400人分の質問紙調査の回答を分析から、F1 リーダーシップ（人をまとめる力） F2 問題解決（問題に対応する力） F3 愛他性（人を思いやる力） F4 頑固さ（信念を貫く力） F5 エチケット（きちんと生活する力） F6 感情制御（御気持ちを整える力） F7 自己超越（生を意味付ける力） F8 能動的健康(生活を充実させる力)として、災害時「生きる力 (F)」を抽出となった。

15:15～

## 2. 東日本大震災への宮城県警の対応 ～他機関連携で何が課題となったのか

講師；発災時元宮城県警本部長（警察謝恩伝道士） 竹内 直人（たけうち なおと）氏



「天災は、忘れた頃にやってくる。」1923年の関東大震災を経験した物理学防災学者の寺田寅彦氏の警句から災害を忘れないことが最も重要である。

### 1.)東日本大震災への対応

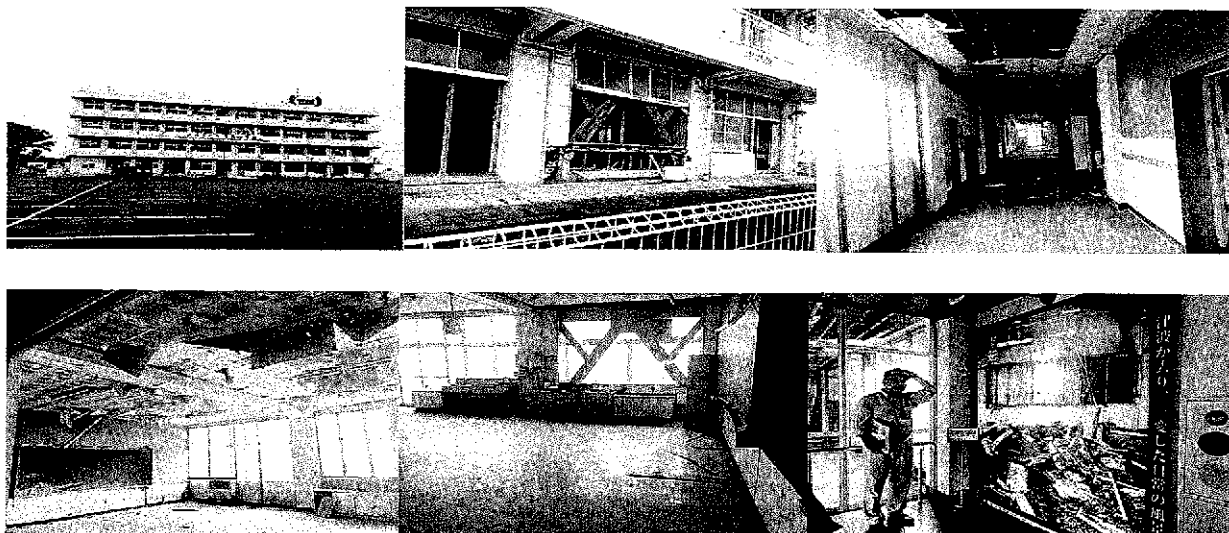
発災当時の宮城県警本部長を担っていたが、まさか自分が東日本大震災時に、警察組織の陣頭指揮を担うとは全く考えていなかった。宮城県庁内での第1回「災害対策本部会議では

- ① 被災情報(初期状況)の収集と情報の混乱では、地震後の津波水没範囲、津波到達エリアの情報確認と事後誤報と確認できたが当初は、未確認流言飛語の情報（例：荒浜に200～300遺体発見等）も含まれていたことで、正確な情報収集に繋げていった。無線の輻輳・途切れの解消に苦慮される。
- ② 避難誘導では、警察官14名が殉職となった。職務遂行・使命を実行することで、海岸付近の空き家等まで深く避難呼び掛けし津波に飲み込まれている。
- ③ 生存者の救出・救助では、生存確率72時間を意識し、不眠不休で消防・消防団、自衛隊と連携し実施すること。特に津波による孤立救出は難航であった。日頃からの防災訓練による安全な避難行動が重要であり、日頃の意識を再確認した。
- ④ 危機管理の要諦では、生存者の救出はもとより、亡くなられたご遺体の確認・検視、ご遺体の安置場所について、地域防災計画と県を跨ぐ広域のご遺体の対応についてどのように進めていくのか等、発災初めて難しさを実感することとなった。「危機管理は想像力」危機管理の基本は悲観的に準備し、楽観的に対処すること。

「想像と準備」では、具体的に準備に繋がらなければ、想像（想定）したことにはならないとして、まずは想像することから出発→知識がないと想像力は及ばない。

現場視察；令和5年7月21日(金)10:00～12:00

### 3. 現地視察 震災遺構仙台市立荒浜小学校～震災の教訓、地域の記憶、後世へ～



上記・旧市立荒浜小学校（宮城県内公立小学校1200校は毎年見学）（説明者-赤間氏）

○3月11日14時46分発災するも被害皆無。1時間9分後6mの津波が襲ってくることになる。

○当日は、市内公立中学校の卒業式。当校児童91名は、1週間後の卒業式が予定されており、1、2年生は早めに下校済。

○荒浜地区は、800世帯2,200人の避難所場所として震災後当校庭まで避難して来るも、呼び掛けても、誰一人校舎に入る人がいなかった。津波の想定校庭が浸かる程度か。津波は来ない！！と誰もが考えていた。（2日前余震、津波はこなかった等）

○海岸から内陸に約700mの位置にある等施設に、避難者は全員で320名。

○校舎2階4.6mの高さまで浸水。津波は、海岸部の松林をなぎ倒し、住宅を飲み込み黒い水が押し寄せ、校舎東側2階ベランダのコンクリート手すりを破壊海水が侵入している。

○氷点下2度余りの中、27時間後全員を救出された。

#### 【感想】

今回の2日間の研修では、講義と現場となり、震災大国日本に住む私たちは、必ず知っておくべき事実であり、どこで災害に見舞われるかある中で「自身の生命をどうして守ることが出来るのか。」「他者含め守れるのか。」を常に意識し学習習得すべき視察内容であったと思う。

併せて、認知心理学・他機関との連携（地方自治体、消防・警察・自衛隊）等含め、災害の知識を深め、対処できるよう想像することが何より重要であると強く意識した研修であった。

# 研修・視察（公明党会派）レポート

2023年7月27日

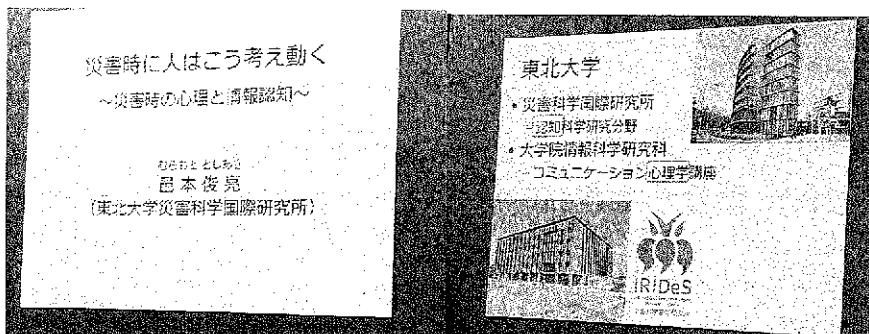
日時：2023年7月20日（木）～21日（金）

参加者：開 康生、蛭子 秀一、東浦 小夜子、中村 敦子、田中 俊孝 以上5名

報告者：蛭子 秀一

## 【研修内容】

### ①災害時に人はこう考え動く《災害時の心理と情報認知》



講師：邑本 俊亮氏（東北大学災害科学国際研究所 教授）

### ●講演内容《情報心理学に基づいた災害時の人々の対応について》

- ①パニック神話
- ②発災時、人は何を思うのか
- ③危険スイッチが入るとき
- ④緊急時の心理と行動
- ⑤今後のためにできること

講演内容については、会派他議員同様に付き省略。

### ●感想

認知心理学について大変興味深い講話でした。

#### ①パニック神話

発災時において人はパニックになると言われているが、局所的に起こることはあるが大規模パニックに発展することはない、との話でパニック神話に惑わされてはいけない。

災害時にパニックの発生を憂慮して、有無を言わさない避難指示や避難指示の遅れは危険であるとのことで、災害情報が発信するには、しっかりとした根拠を示して早い避難指示を発信するべきであることを学んだ。

#### ②発災時、人は何を思うのか

人はこれまでの記憶、期待、思い込みなどによって判断・行動が行われる。  
 発災時にリスク情報が発信されても、個々に情報のバイアス（歪み・偏り）がある。

- A,楽観主義バイアス [自分には関係ない]
- B,集団同調性バイアス [みんなが行動しないので、自分もしない]
- C,確認バイアス [自分の気持ちを確認してくれる情報のみを求める]

人間の認知・判断にはバイアスがつきもので、いざという時にはバイアスを振り払う心構えが必要である。

例えば、「自分だけは大丈夫」「前回も大丈夫だったから、今回も大丈夫!」「前回、警報が出たけれど大丈夫だった」「あの防潮堤があるから大丈夫」「ハザードマップの危険区域ではないから」

### ③危険スイッチが入るとき

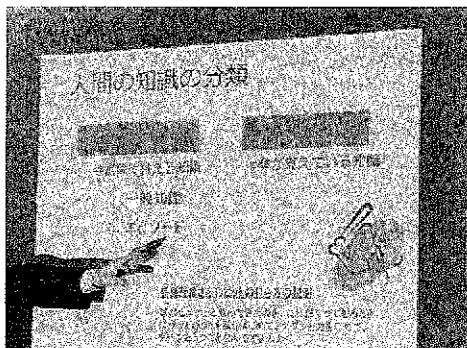
環境における明らかな変化が起こった時、他人からの今までにない強い声掛けがあった時など、日常とは違う事象に直面した時に危険スイッチが入る。

切迫感、命令口調も有効的であること。

### ④緊急時の心理と行動 <人間の認知機能は2つのシステムがある>

「直観的思考」→無意識的、直観的

「熟慮的思考」→意識的、熟慮的、論理的



- a 情報処理範囲が狭くなる
- b 注意集中による見落としが起きる
- c 熟慮的思考は困難
- d 災害時に家族のことが気になる

#### ●すぐに避難しなかった理由

- ・自宅に戻ったから
- ・家族を探しに行ったり、迎えに行ったから
- ・家族の安否を確認していたから
- ・過去の地震でも津波が来なかったから
- ・地震で散乱した物の片付けをしていたから
- ・津波のことは考えつかなかったから

以上のことから、緊急時は熟慮的思考は働きにくい。

### ⑤今後の為にできること

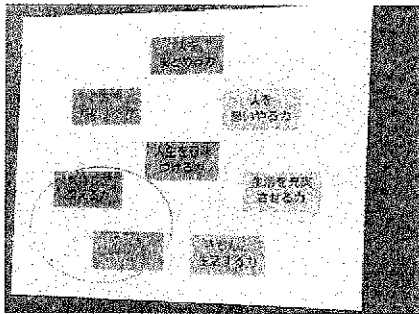
- A、知ること（災害を知る、人間の認知特性を知る）
- B、育むこと（災害を生き抜く力を育む、災害時に体が動くようにしておく（防災訓練）
- C、忘れないこと（震災を忘れまい）

以上のことから【情報を受け取る際の個人差がある】それは知識や経験の差から来る差異で経験や確かな知識が必要である。そして、知識は持っていれば良いということではなく、必要な時に知識を活性化できることが重要であると教えて頂いた。

「認知バイアスがある」→災害時の適切な判断

「緊急時の認知特性を知っている」→見落としや誤判断の可能性に気付ける、事前に家族内で話し合いをしておく。

【災害時の8つの「生きる力」を抽出】東日本大震災での経験から

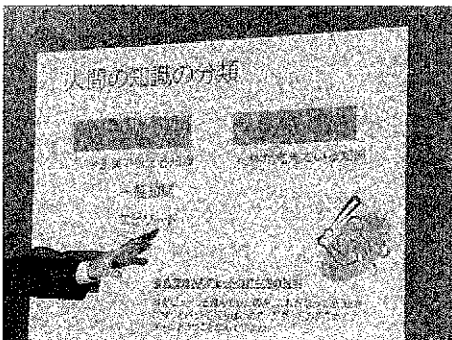


- ① リーダーシップ（人をまとめる力）
- ② 問題解決（問題に対応する力）
- ③ 愛他性（人を思いやる力）
- ④ 頑固さ（信念を貫く力）
- ⑤ エチケット（きちんと生活する力）
- ⑥ 感情制御（気持ちを整える力）
- ⑦ 自己超越（人生を意味付ける力）
- ⑧ 能動的健康（生活を充実させる力）

東日本大震災での経験された1400人分の回答分析、聞き取り調査から示された上記8つの災害時の生きる力が大事である。

そして、防災訓練の重要性を学ぶ。

- ① 参加者の防災意識向上
- ② 実地訓練に勝るものなし
- ③ 身体覚える



宣言的知識→言葉で言える知識

一般知識

手続き的知識→体が覚えてる知識

エピソード

### 【震災を忘れない】防災訓練の重要性

人間の記憶は時間とともに薄れる

忘れないためには、何度も思い出すこと



## ②東日本大震災への宮城県警の対応<他機関連携で何が課題となったか>

講師：竹中 直人 氏

元警察大学校長、発災時宮城県警察本部長

### ●東日本大震災への対応

- ①被災者情報収集 ②避難誘導 ③生存者の救出・救助 ④捜索 ⑤検視・身元確認
- ⑥行方不明者対策 ⑦被災者支援 ⑧パトロール、交通対策

### ●他機関連携：広義の行方不明者対策

### ●危機管理の要諦：危機管理は想像力、知識がないと想像力が及ばない

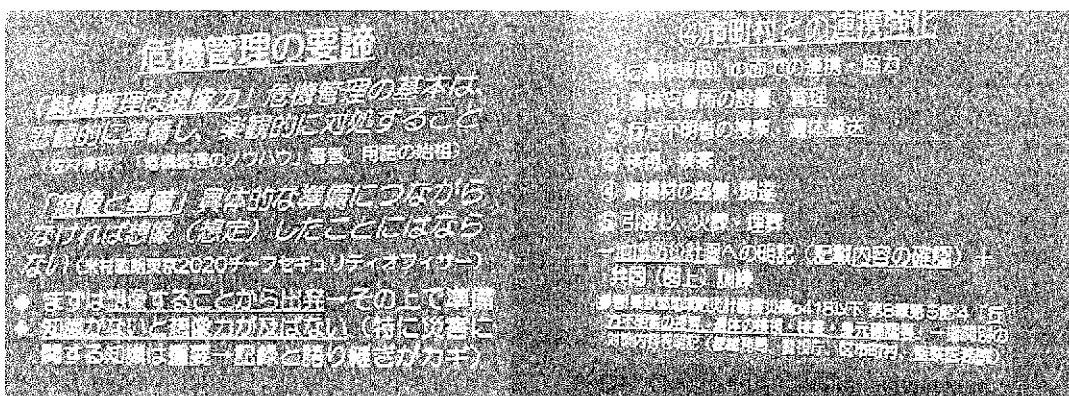
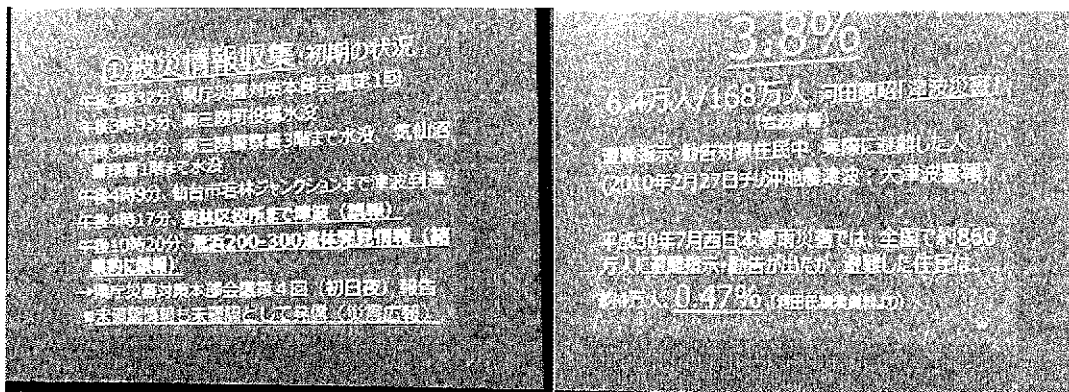
### ●警察組織にとっての教訓【想定外を最小限に】

- ① 広域・激甚な被害への備え（確率がゼロでない事象はいつか必ず起こる）
- ② 迅速・正確な被災情報収集
- ③ 避難誘導配置箇所の吟味（+タイムリミット）装備品整備（救命胴衣・ヘルメット）
- ④ 市町村との連携強化：特に遺体取り扱いも面での連携・協力

#### →地域防災計画への明記+共同訓練（図上）

【感想】国・県・自治体との連携の必要性、他機関（警察・消防・自衛隊）連携、そして地域コミュニティとの連携が課題であり大災害を想定した訓練は重要である。

地域防災計画の実効性を末端の地域コミュニティ、市民との共有で被害を最小限に収め、早期復興につなげたい。その為にも発災時の正確な情報収集と情報発信は要となる。①での講義で学んだ災害対応策も含めて各地方自治体での体制強化・相当な準備が急務であると認識した。



### ③現場視察（震災遺構）

#### 【仙台市立荒浜小学校】

当時、海岸から700Mの位置に立地されていた。発災から1時間余りで校舎2階まで津波が一気に押し寄せた。想定1.2Mであったが、4Mの津波が・・・！





【天災は忘れたところにやってくる】

【備えあれば憂いなし】

先人が言われた言葉が現在も言われ続けられている。

## <研修レポート>

日時：2023年 7月20日 13:30~16:45 7月21日 10:00~12:00

報告者 東浦小夜子

### 【研修内容】

災害時に人はこう考え動く ～災害時の心理と情報認知～

講師：邑本俊亮（東北大学災害科学国際研究所）

#### 講演概要

1. パニック神話
2. 発災時、人は何を思うのか
3. 危険スイッチが入るとき
4. 緊急時の心理と行動
5. 今後のためにできること

1、パニックとは、恐怖にかられた多数の人々が理性を失い、原始的本能のおもむくままにヒステリックになり、群衆の中で大混乱が発生し、多数が犠牲になる様子である。

パニック神話とは。災害や事故に巻き込まれると人々はパニックになるといわれる。しかしパニックは稀にしか起こらない。災害情報を発信する側に必要なことは、パニック発生を憂慮して、有無を言わさない避難指示、避難指示の遅れが危険であるため、根拠を示して避難指示を出すべきである。

2、発災時、人は何を思うのか。災害時の認知バイアス、(バイアス=かたより、ゆがみ) 避難情報が届いてないわけではないが、これくらいは普通の範囲だ、物事を普通の範囲内で理解したいという、正常性バイアス、正常化の偏見が働き、自分の都合の良いように理解してしまう。楽観主義バイアス、確証バイアス、集団同調性バイアスがかかる、人間の認知・判断にはバイアスがつきもので、いざというときには、バイアスを振り払う心構えがいる。

3、危険スイッチが入る。何が危険スイッチを押してくれるのか、きっかけはなにか、環境における明らかな異変や他者からの声掛けが大事で切迫感、命令口調が有効である。

4、緊急時の心理と行動。情報処理範囲が狭くなる、注意集中による見落としが起こる、熟慮的思考が困難になる。(大災害時には) 家族のことが気になる、家族と連絡をとる、家族を迎えに行くという行動を起こしやすく、普段できていることが、できなくなる、ヒューマンエラー。5、今後のためにできること。知る事、育むこと、忘れない事、が大事である。

災害大国にも関わらず、災害教育がなされていない、被災後のことを知らない、トータルで学ぶ機会がない(災害時の人間心理) 知識は持っていればよいというわけではない、必要な時に、知識を活性化することが重要である。

## 東日本大震災への宮城県警の対応 ～他機関連携で何が課題となったか～

講師：竹内直人（警察謝恩伝道師 元警察大学校長、発災時宮城県警察本部長）

### 東日本大震災への対応

発災当時の宮城県警察本部長であった竹内氏の講演から、

- ① 被災情報収集、②避難誘導 ③生存者の救出・救助 ④捜索 ⑤検視・身元確認
- ⑥ 行方不明者対策 ⑦被災者支援 ⑧パトロール、交通対策

以上の項目に分けて、当時の状況の説明をうけた。

結果的に14名の殉職者を出してしまった。現場の職員には身の安全を確保して任務遂行と言いながら、危険度の認識が甘かった。現場に長く留まりすぎた、一斉撤収せよと言えなかったことに悔恨。生存者の救出・救助にも難航したが、亡くなられた方の遺体の確認・検視・安置場所の確保は困難極める。県、市町村との連携強化、特に遺体取扱いの面での連携・協力重要。地域防災計画への明記が必要である。

### 現場視察：2023年7月21日（金）10：00～12：00

#### 震災遺構仙台市立荒浜小学校

2011年3月11日に発生した東日本大震災において児童、教職員、住民ら320名が避難し、2階まで津波が押し寄せた。1階、2階の校舎の被害状況や被災直後の様子を伝える写真などから、荒浜小学校を襲った津波の脅威を知ることが出来た。4階展示室において、映像「3.11 荒浜小学校の27時間」14時46分の地震発生から、27時間後の避難者全員の救出迄を、当時の校長や、町内会会長のインタビューを交えたものを見ることができた。

4階屋上に上がり、荒浜地区全体を見渡すことができ、海岸から700m内陸の位置を確認し被災前後の風景を比較することができた。

#### 《感想》

今回の研修は、座学と荒浜小学校を現地視察できた事に、災害心理と情報認知がいかに重要であるかを痛感できた非常に有意義な研修でした。震災遺構を訪れることは、災害の記憶を風化させないために重要で、更には、知ること、育むこと、忘れないことを、全国民が常に意識していくことが大事であります。地球規模で激甚災害が広がる中、安全な場所はどこにもない、いつでもどこにいても災害被災者になりうる事を認識して、自助、共助、公助の取組みを進めて行くことが重要です。今後の市政に役立てまいります。

# 行政視察(会派)レポート

2023年7月30日

H時:2023年7月20日～21日

研修会場：TKP仙台西口ビジネスセンター

参加者：開康生・蛭子秀一・東浦小夜子・田中俊幸・中村敦子

報告者:中村 敦子

## <研修内容>

### 東日本大震災から学ぶ防災

#### ①災害時に人はこう考え動く～災害時の心理と情報認知～

講師:呂本俊亮氏 (東北大学災害学科国際研究所教授)

認知心理学：災害時の人々の対応は記憶・期待・思い込みにより

情報→認知・理解→判断→意思決定→行動を起こす

正しい判断ができなくなる。

講演概要

- 1.パニック神話
- 2.災害発生時、人は何を思うのか
- 3.危険スイッチが入るとき
- 4.緊急時の心理と行動
- 5.今後のためにできること

一般的に災害や事故に巻き込まれると人々はパニックになると思われているが、実際はパニックは稀にしか起こらない。

災害時に人間は非理性的にはならない。反社会的な行動をすることもほとんどない。

避難行動は、人間関係や他者から期待された社会的役割に基づいて行われる。

パニックが発生しても局所的な出来事にとどまり、大規模パニックに発展することはほとんどない。

それらを踏まえて、災害情報を発信する側に必要なことは、パニック発生を憂慮しての支持

は危険であり、早めにしっかりとした根拠を示した避難指示を出すべきであるとのこと。  
災害発生時はどうしても人はリスク情報が入ったとしても、自分には関係ないことと思ってしまう心理がある。いわゆる個々人で情報のバイアス(歪み、片寄り)があり、自分だけは大丈夫との楽観主義バイアス、みんなが逃げないから自分も逃げないとの集団同調性バイアス、以前警報が出たけれど大丈夫だったからとの確証バイアスなどがあり、人間の認知・判断にはバイアスがつきものとの認識で、いざという時はバイアスを振り払う心構えが大切である。

危険スイッチが入るときは、環境における明らかな異変があったり、他でより強い声かけがあった時など、日常とは違う事象に直面した時に入りやすい。切迫感や避難指示の命令口調なども有効的とされ人間の認知機能は 2 つのシステムから成り立っている直感的思考と熟慮的思考である。

直感的思考は無意識的、素早い、熟慮的思考は意識的・論理的である。

災害時や緊急時には、熟慮的思考は働きにくい。その結果、情報処理範囲が狭くなることや注意集中による見落としが起こる。そして重要なことが、大災害時などには家族ことが気になってしまう。

大型地震の際のアンケートで、すぐに避難しなかった理由の多くは家族を探したり、家族の安否確認を行っていたためとの理由が上位

これらを総合的に踏まえて今後のためにできることは、**知ること、育むこと、忘れないこと**の3点を強調。

知ることとは、平時からの災害教育が大切であり、人間の認知特性を知りそれらをわかった上で、時々刻々と何が重要で、必要なことかを判断し行動していくことが大事。

育むこととは、災害を生き抜く力を日頃から育み、防災訓練などで災害時に体が動くようにしておくこと。

忘れないこととは、過去の震災や教訓などを学び返しながら、震災を忘れない、将来の災害に備える重要性。

災害に対する知識も持っていれば良いというわけではなく、必要な時に知ることが重要である。

例えば「認知バイアスを知っているから」⇒災害時の適切な判断や行動がとれる | 緊急時の認知特性を知っていることは⇒見落としや誤判断に気づける・事前に家族内での災害時の取り決めや、話し合いをしておく

また災害時の8つの「生きる力」が大事である。

東日本大震災での経験から

人をまとめる力・問題に対応する力・信念を貫く力・きちんと生活する力・気持ちを整える力・人生を意味づける力・生活を充実させる力が大切ある。

**【災害を忘れない】**日頃からの防災訓練も重要であり、人間の記憶は時間とともにどうしても薄れていくため、教育や学びによって、忘れないということが大切である。

## ②東日本大震災への宮城県警の対応～他機関連携で何が課題となったか～

講師:竹内直人(警察恩芸師.元宮城県警察本部長)

### ・講演概要

宮城県警本部長として未曽の東日本大震災に被災し、被災情報の収集や、死亡者の検視・身元確認などで混乱を極めた事象を踏まえ、今後大災害時対応をよりスムーズに行うために何が必要か、以下の要点に絞っての講義。

東日本大震災への対応

- ・被災情報収集・避難誘導・生存者救・救助捜索・身元確認
- ・行方不明者対策被災者支援・パトロール・交通対策

他機関連携:広義の行方不明者対策

危機管理の要諦(危機管理は想像力、知識がないと想像力が及ばない)

まとめ:警察組織にとっての教訓～想定外を最小限に～

## ③現場視察

### 震災遺構仙台市立荒浜小学校

当時、海岸から700メートルの位置にあった小学校。津波発生から1時間余りで校舎2階まで津波が押し寄せた。現在現地では震災の教訓、地域の記憶を後世にとの思いでガイドやパネル、映像、特に災害にあった校舎が語っていました。

### 感想

大震災の被災者支援の指揮をとられた方の講義で、非常に説得力がある講義でした。災害時の心理と情報認知、研究、体験。防災における経験を生かした対策の重要性を学びました。想定を超える被災者や死亡者が発生した場合の対策、警察、国、県や市町村の連携など、まだまだ整理、整備すべき課題が多いことを認識しました。

知ること、平時からの災害教育が大切である。育むこと、災害を生き抜く力を日頃から育み、防災訓練などで災害時に体が動くようにしておくこと。

忘れないこととは、過去の震災や教訓などを学び返しながら、震災を忘れてはいけない。3つを大事に災害教育を行っていくべきである。また自治体でできること、事前に想定して検討し、対策を講じていくべきことを整理して、早急に政策提案に活かしていきたいと思いました。



## 研修（会派）レポート

2023年 7月 24日

日時： 2023年7月20日 ～ 21日

参加者：開康生・蛭子秀一・東浦小夜子・中村敦子・田中俊幸

報告者：田中俊幸

### <研修内容>

#### ① 災害時に人はこう考え動く～災害時の心理と情報認知～

講師：邑本 俊亮氏（東北大学災害学科国際研究所 教授）

#### □講演概要とその内容

認知心理学に基づいた災害時の人々の対応について

- 1, パニック神話
- 2, 災害発生時、人は何を思うのか
- 3, 危険スイッチが入るとき
- 4, 緊急時の心理と行動
- 5, 今後のためにできること

○ 一般的に災害や事故に巻き込まれると人々はパニックになると思われているが、実際はパニックは稀にしか起こらない。

災害時に人間は非理性的にはならない。反社会的な行動をすることもほとんどない。

避難行動は、人間関係や他者から期待された社会的役割に基づいて行われる。

パニックが発生しても局所的な出来事にとどまり、大規模パニックに発展することはほとんどない。

それらを踏まえて、災害情報を発信する側に必要なことは、早めにしっかりとした根拠を示した避難指示を出すべきであるとのこと。

○ 災害発生時はどうしても人はリスク情報が入ったとしても、自分には関係ないことと思ってしまう心理がある。いわゆる個々人で情報のバイアス（歪み、片寄り）があり、自分だけは大丈夫との楽観主義バイアス、みんなが逃げないから自分も逃げないとの集団同調性バイアス、以前警報が出たけれど大丈夫だったからとの確証バイアスなどがあり、人間の認知・判断にはバイアスがつきものとの認識で、いざという時はバイアスを振り払う心構えが大切である。

○ 危険スイッチが入るときは、環境における明らかな異変があったり、他者からの今までよりも強い声かけがあった時など、日常とは違う事象に直面した時に危険スイッチが入りやすい。切迫感や避難指示の命令口調なども有効的とされている。

○ 人間の認知機能は2つのシステムから成り立っている。

直感的思考と、熟慮的思考である。

直感的思考は無意識的、素早い、直感的なのに対して、熟慮的思考は意識的、遅い、熟慮的、論理的である。

災害時や緊急時には、熟慮的思考は働きにくい。その結果、情報処理範囲が狭くなったり、注意集中による見落としが起こる。そして重要なことが、大災害時には家族のことが気になってしまう。

過去の大型地震の際のアンケートで、すぐに避難しなかった理由の多いベスト3の理由が、家族を探したり、家族の安否確認を行っていたためとの理由が上位を占める。

○ これらを総合的に踏まえて今後のためにできることは、知ること、育むこと、忘れないことの3点を強調。

知ることとは、平時からの災害教育が大切であり、人間の認知特性を知りそれらをわかった上で、時々刻々と何が重要で、必要なことを判断し行動していくことが大事。

育むこととは、災害を生き抜く力を日頃から育み、防災訓練などで災害時に体が動くようにしておくこと。

忘れないこととは、過去の震災や教訓などを学び返しながら、震災を忘れない、将来の災害に備える重要性。

災害に対する知識も持っていれば良いというわけではなく、必要な時に知識を活性化できることが重要である。例えば認知バイアスを知っているからこそ、災害時の適切な判断や行動をとり、緊急時の認知特性を知っているからこそ、見落としや誤判断に気づける。事前に家族内での災害時の取り決めや、話し合いをしておくことが重要。

常日頃からの防災訓練も重要であり、人間の記憶は時間とともにどうしても薄れていくため、教育や学びによって、忘れないということが大切である。

## □感想

今までなんとなくわかっていたことが、今回しっかりと講義を受ける中で、大変わかりやすく、とても勉強になりました。人間の特性や、傾向性、認知心理学を学ぶ中で、それらをしっかりと踏まえた上で災害対応策を立てたり考えたりすることがとても重要であると認識しました。また地震大国の日本にとって災害や避難行動を学ぶための未成年の間からの災害教育が非常に重要であるにも関わらず、十分に行われていない現状にも危機感を持ちました。これらをどのように地方自治の災害対策に活かしていくべきか、大変参考になるものでした。

② 東日本大震災への宮城県警の対応～他機関連携で何が課題となったか～  
講師：竹内 直人氏（警察謝恩伝道師・元宮城県警察本部長）

□講演概要とその内容

宮城県警本部長として未曾有の東日本大震災に被災し、被災情報の収集や、死亡者の検視・身元確認などで混乱を極めた事象を踏まえ、今後の大災害時の対応をよりスムーズに行うために何が必要か、以下の要点に絞っての講義。

東日本大震災への対応

- 被災情報収集○避難誘導○生存者の救出・救助○捜索○検視・身元確認
- 行方不明者対策○被災者支援○パトロール・交通対策

他機関連携：広義の行方不明者対策

危機管理の要諦（危機管理は想像力、知識がないと想像力が及ばない）

まとめ：警察組織にとっての教訓～想定外を最小限に～

□感想

県警の最前線の現場で大震災の被災者支援の指揮をとられた方の講義で、非常に緊迫感があり、説得力がある講義で、大変勉強になりました。

想定を超える被災者や死亡者が発生した場合の検視であったり、遺体安置所であったり、火葬をどうするか、身元確認をどうするかなど、警察、国、県や市町村の連携など、まだまだ整理、整備すべき課題が多いことを認識しました。

しっかりと自治体でできること、事前に想定して検討したり、対策を講じていくべきことを整理して、早急に政策提案に活かしていきたいと思います。